

NEWS LETTER No.11 2010.12

環境科学研究科ニュースレター

<http://www.kankyo.tohoku.ac.jp/>

地域連携環境教育・研究センターの設立と意義

生産活動を妨げる長期間の服喪を禁じて、民生の安定を図るべきだとする節葬、(7) 兼愛や非攻の実践を要求するのが天帝の意志であり、人間はそれに従うべきだと説く天志、(8) 鬼神の懲罰を恐れて犯罪行為を中止するよう求める明鬼、(9) 為政者に対し富を浪費する音楽にふけることを止め、冗費を節約するよう要請する非楽、(10) 宿命論を信じて人為的努力を怠ってはならないと戒める非命の十個となっている。

十論がそれぞれどのような目的を持っていたのかは、『墨子』魯問篇の記述によって明らかになる。

子墨子、魏越を遊ばしめんとす。日く、既に四方の君子に見ゆるを得ば、則ち將に先に語らんやと。子墨子曰く、凡そ国に入らば、必ず務めを扨びて事に従え。国家昏乱なれば、則ち之に尚賢・尚同を語れ。国家貧しければ、則ち之に節用・節葬を語れ。国家音に惑びて湛溺すれば、則ち之に非楽・非命を語れ。国家淫僻にして礼無ければ、則ち之に尊天・事鬼を語れ。国家奪に務めて侵凌すれば、則ち之に兼愛・非攻を語れ。故に日く、務めを扨びて事に従えと。

墨子先生は門人の魏越を遊説に派遣しようとした。魏越は墨子先生に尋ねた。すでに諸国の為政者に面会できたならば、最初に何を彼等に説きましようか。墨子先生は答えられた。ある国家に入ったならば、必ず緊急の任務を選んで説得活動を行うがよい。もし訪れた先の国家の国内秩序が混乱していたならば、彼等に尚賢と尚同の思想を説いて聞かせよ。もし訪れた先の国家が経済的に貧困であったならば、彼等に節用と節葬の思想を説いて聞かせよ。もし訪れた先の国家が音楽に溺れていたならば、彼等に非楽と非命の思想を説いて聞かせよ。もし訪れた先の国家が傲慢で無礼であったならば、彼等に尊天と事鬼の恩恵を説いて聞かせよ。もし訪れた先の国家が好戦的で侵略戦争に熱心であったならば、彼等に兼愛と非攻の思想を説いて聞かせよ。そこで世間でも、最優先の任務を選んで仕事をすべきだと言われているのだ。

墨子は遊説の旅に出る弟子の魏越に対して、遊説先の各国の状況に応じて、説得すべき論点を選択するよう指示しているが、その中には十論すべてが揃っている。そこで十論の主張は、早くも墨子の時代に成立していたと見ることができる。また相手の国情により適宜十論を使い分けよとの発言は、十論の最終目的がいずれも諸国家の安定的存続に置かれていたことを示している。

墨子の思想は、大国による侵略と併合によって周の封建体制が破壊され、多くの国家が減んで行く事態を阻止して、天下の諸国家が相互に領土を保全し合いながら、

安寧に共存する体制を再建しようとするところに、その目的があった。そこで十論の中、兼愛と非攻は、他国への侵攻や領土の併合は人類への犯罪だと訴えて、加害者たる大国にその中止を求める意図から形成されている。さらに天志と明鬼は、侵略と併合は天帝と鬼神も禁止されているとして、前記の主張を補強する意図から形成された。

強大国による侵略と併合を阻止するためには、被害者となる小国の側にも、国内を安定させ、防衛態勢を強化して、攻撃を断念させる努力が求められる。国内の社会秩序維持を説く尚賢と尚同、冗費の節約による国家財政の充実を説く節用と節葬、勤勉な労働と富の増産を説く非楽と非命などは、そのために用意されている。このように十論全体は、諸国家を保全して封建体制を維持せんとする目的を共有する、一個の思想体系を成している。

墨子の学田は孔子の学団に較べると、かなり組織化されていた。『墨子』耕柱篇には、二人の門人が「義を為すに孰れか大務と為すや」と質問したことが見える。これに対して墨子は、牆の造築における分業を比喻に引きながら、「能く談弁する者は談弁し、能く書を説く者は書を説き、能く事に従う者は事に従う。然る後に義の事成れるなり」と答えている。これによれば墨子の学団内部は、諸国を遊説して墨家思想を広める布教班、学団内で典籍・教本の整備や門人の教育を担当する講書班、食糧生産や雑役、守城兵器の製作や防御戦闘に従事する勤労班の三グループに、大きく組織されていた様子がうかがえる。大国が小国を侵略するとの情報が入ると、墨子は防御部隊を率いて小国に赴き、城壁の上に陣地を構えて侵略を阻止しようとしたから、防御戦闘に従事するグループは平素から戦闘訓練を積んでいたと思われる。この他、学団から派遣されて諸国に仕官し、官僚としての立場から墨家思想の普及に尽力する門人たちも多数存在する。

墨子の学団では、遊説班の活動を容易にするため、諸国に仕官した門人たちに支部の役制を務めさせていた。また各国に仕官した弟子たちは、それぞれの俸禄の中から学団に送金していた。質素・節約を旨とする墨家集団では、食料や衣料などの大半は自給自足の体制が取られていたろうが、それにしても多数の門人を養ったり、非攻を実践するために守城兵器を製作したりするには、多額の費用が要る。

説話類では、魯の君主がしばしば墨子に相談を持ちかけており、自国内にいた墨子の学団に対し、顧問料のような形でかなりの資金援助をしたはずである。また孔子学団のように明白な記録はないが、門人たちはなにがしか入門料ないし授業料に相当するものを持参したであろう。さらに墨子に城邑の防衛を依頼した君主たちも、しかるべき献金を行なったと思われる。これらと、各国に駐在する門人たちからの送金とを主な財源として、墨子は学団を運営していたのであろう。

【次号へ続く】



左から奥山仙台市長、田路研究科長、高橋東北経済連合会会長

地域連携環境教育・研究 センターの設立と意義

環境科学研究科教授 吉岡敏明

設立の趣旨

近年における人間活動の急速な拡大が、資源・エネルギーの大量消費と廃棄を通じて、気候変動、生態系の破壊、廃棄物問題に代表されるような地球環境問題を引き起こしていることはもはや周知の通りです。こうした人類の生存に係る地球規模の課題の解決に取り組むには、人間活動が地球・社会・人間システムとその相互関係に破綻をもたらしつつある状況を正しく、統合的に理解し、グローバル・サステナビリティ（持続可能性）の観点からシステムを再構築する必要があります。低炭素社会、資源循環型社会、自然共生社会に代表されるグローバル・サステナビリティ社会を実現するためには、人類が直面する喫緊の地球環境問題を正しく理解し、問題解決のための科学的知識をみんなが共有することが大切です。この科学的知識は政策へ反映され、さらに社会の方向付けの基になることを私たちは認識しなければなりません。グローバル・サステナビリティ社会の実現の原動力は、産官学民の連携による科学的知識創出といってもいいでしょう。

環境科学研究科は、創設以来、新しい環境調和型の先端学術を世界に発信し、未来発展型社会構造の構築に果たすべき役割と責務は大きいという使命観の下で、持続可能な発展をささえる文化と循環社会の基盤となる社会構造の確立、並びに21世紀の地球規模の課題に取り組む高度な知識と能力を有する人材の育成に取り組んで参りました。

今後、上述の取り組みを推進するためには、地域との緊密な連携による教育・研究が必要不可欠であると考え、「地域連携環境教育・研究センター」を設立しました。地域連携環境教育・研究センターは、地方自治体、民間企業、市民（NPO）のニーズと、環境科学研究科のシーズの共有の場として活用し、ビジネス・自治体・研究技術を各々の実績・強みを活かした相互補完的な包括的連携ネットワークとして構築していくことを目指します。

設立の経緯

環境科学研究科では、平成21年3月に「環境教育・研究センター」を研究科内に立ち上げ、教育と研究の両面から地域との連携を強化してきました。元々、本研究科は宮城県との間で連携と協力に関する協定を平成16年11月から結んでおり、環境及びエネルギーに関して（1）政策、施策に関する連携事業、（2）共同研究、（3）社会人リカレント教育及び研修、その他、（4）県民を象徴とする環境教育の実施、（5）講演会、研究会等の共同開催、（6）定期刊行物やその他出版物の交換、等様々な協力関係を推進していました。平成21年11月には、仙台市との間で同様の連携と協力に関する協定を結び、地域との連携が益々強くなってきたことを受けて、11月30日に「地域連携環境教育・研究センター」を設立しました。さらに、東北経済連合会も参画する形で平成22年4月には「地域連携環境教育・研究センター」の規約を整え、現在に至っています。

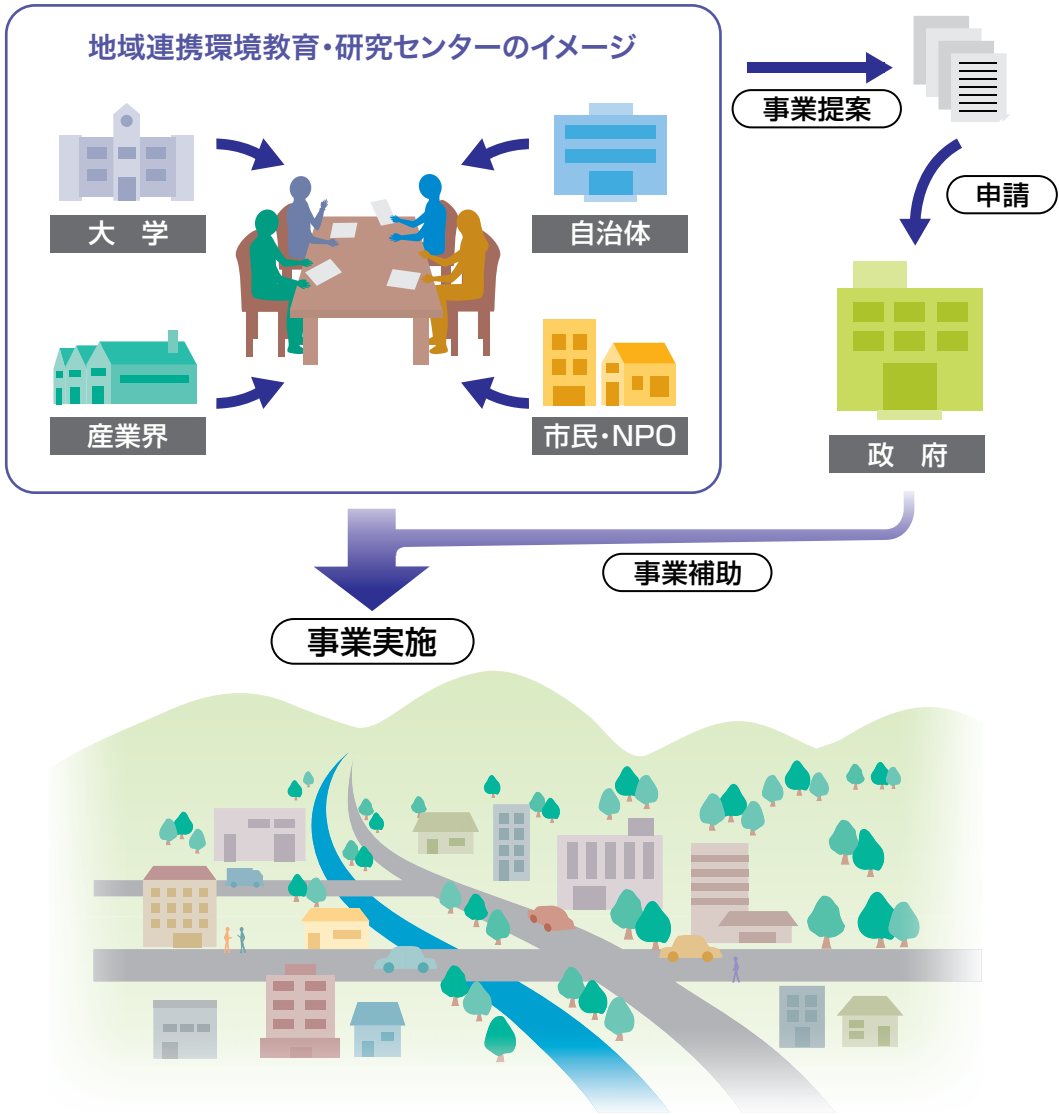
仙台市との協定締結式（平成21年）

地域連携環境教育・研究センターのミッション

センターといっても建物があるわけでも、特別に予算化するわけでもありません。自由活発な意見交換の場(テーブル)とイメージすれば分かりやすいと思います。組織的には「協議会的」なテーブルです。組織間で何か打ち合わせすることになると、得てして杓子定規的になりがちで、且つ事前に各組織内でコンセンサスを取ることが必要になることがあります。自由活発な意見交換をする時の足かせになる要因にもなります。また、どの組織で、どんなことが「できるのか?」「できないのか?」その判断と選択に困ることも生じます。普段からの相互間の話し合いが必要でしょう。

正直に言えば、シーズを持っている大学側はその全てを把握しているわけでも、また大学の外側社会が知っているとも限りません。今後は本研究科が中心となって進めている「環境ウェブリ: <http://webrary.kankyo.tohoku.ac.jp/>」が大きな役割を担うことになるでしょう。産業界のニーズに対しても同じようなことが言えます。行政の役割も然りです。どのような手続き、過程や仕組みでシーズとニーズと結び付けて花開かせるかは、柵のないゼロベースからの忌憚ない意見交換の場が大きな役目を果たします。普段からのこのような取り組みは、新たな環境政策の提言にも繋がると同時に、喫急を要する政策にも対応が可能になるでしょう。これは、何か連携プロジェクトを立ち上げて実施する際には、そのシーズを持っている側の誰かが推進者になることも、ニーズを持っている側が推進者になることも可能であることを意味しています。

現在、このセンターでは「できるか?できないか?」「やる気があるか?ないか?」を含めて、様々なトピックを挙げて検討しているところです。



》検討中の TOPICS

地域の環境及びエネルギー政策、施策に関する連携事業

- 温泉街からの廃棄物の循環利用と処理に関する技術開発と社会実験
- 環境関連研究・教育・政策・活動ネットワーク情報データベースの構築
- 学生・地域住民を対象とした環境関連施設等の見学
- 県産材の利用促進に係わる連携事業の推進
- 古紙リサイクルに関する産業界との連携事業の試行

環境及びエネルギーに関する共同研究

- 生活系の剪定枝や落ち葉のリサイクル
- 生ごみのリサイクル及び収集方法
- 古布の新しい活用方法
- 温泉排水に含まれる砒素及びホウ素の安価な除去方法
- 土壌に含まれる自然由来の重金属の安価な除去方法
- 処分場の排水に含まれる塩分の安価な除去方法
- 保健環境センター等、自治体の研究センターとの共同研究の推進
- 競争資金等、外部資金の共同獲得

環境及びエネルギーに関する社会人リカレント教育及び研修

- 学生・自治体職員・地域住民を対象にした講演会

市民を対象とする環境教育の実施

- 県民・市民センターでの講座

環境及びエネルギーに関する講演会、研究会等の共同開催

- 資源循環に関するシンポジウム(ワークショップ)の共同開催
- 関連学協会との共催事業

センターの看板に込められた思い

本センターの看板は現在当研究科の「エコラボ」の一室に掲げられていますが、それ以上に、地域連携を象徴する意味が込められています。仙台市から提供された仙台のシンボルでもある「ケヤキ」を使っていること、看板の裏側には、センター設立時に協力関係を築いた宮城県、仙台市、東北経済連合会の名が刻まれていることです。

平成 21 年 3 月に研究科内に立ち上げた「環境教育・研究センター」の看板は、将来「地域連携」が実現した際にしっかりとした意味のある看板を掲げたいという思いから、研究科長室に紙で印刷したものを貼っていました。ちょっとした事です、非常に重い意味と願いが込められています。我々はこのセンターを活性化させ、実のある成果ができることを肝に銘じたいと思います。

本センターは、四つの組織の連携で動き始めましたが、これに拘らずにプロジェクトの内容によっては、NPO や他の組織が加わることを歓迎しています。是非、積極的に多面からの参画をお願いいたします。



龍は雲に登り 神は崑崙に棲む

第10回

黄河文明の翳

東北大学 名誉教授 浅野 裕一

第四章 墨家の節儉思想

(前号の続き) 儒家の孟子や荀子は墨子を最大の敵対勢力と見なし、口を極めて墨子の思想を非難した。特に荀子は、前章で紹介したように、墨子の経済思想を激しく論難している。そこで本章では墨子によって創設された墨家の考え方を見ていくことにするが、その前に墨家について概説して置くことにしたい。

墨子は魯の人で、本名を墨翟という。墨子は春秋の末年、およそ前四五〇年頃、魯に学閥を開き、多数の門人を集めて教育した。その意図は、墨子の思想を忠実に実践する門人（墨者）を大量に養成し、彼等を官僚として各国の朝廷に送り込んだり、彼等に諸国を遊説させたりして、自分の思想を天下に実現しようとする点にあった。

だがせっかくの墨子の計画も、最初のうちはなかなか狙いどおりには運ばなかった。というのは、集まってきた弟子たちの入門動機は、墨子のもとで学問を身につけ、高級官僚として諸国に仕官したいとする一点にあって、墨子の思想に共鳴したからではなかったからである。つまり理想実現のために魯に学閥を創設した墨子の思惑と、利益目当てに入門してきた弟子の思惑は、最初からすれ違っていたのである。こうした弟子たちが相手であるから、墨子の苦心も並大抵ではなく、『墨子』の説話類には、さっぱり学ぼうとしないくせに、就職ばかりを要求する弟子たちの怠惰な行状と、なだめたりすかしたりしながら弟子を教育しようとする墨子の苦戦ぶりが描かれる。

入門してくる弟子たちの意識がこうした水準である以上、必然的に墨子は、門弟の質的向上といった難問に直面せざるを得ない。そのために墨子が用いたのは、弟子たちに鬼神信仰を吹き込む方法であった。墨子は鬼神は明知であって、人間のあらゆる行動を見通しており、善行には福をもたらし、悪行には禍いを下して、人間の倫理的行動を監督すると教えた。すなわち墨子は、鬼神の権威を借りた外部からの強制を、教化の有力な手段に据えたのである。そもそも弟子たちの入門動機が、仕官によって我が身の利益を追求しようとするところにあったから、こうした利益誘導は、彼等に対して最も即効性を発揮するやり方であったろう。

だがこうした教化方法は、たしかに手っ取り早い半面、弟子たちを心の内面から義に向かわせる側面では、大きな限界をも抱えている。所詮は鬼神による監視と利益誘導の組み合わせであるから、願いどおりの結果が出なかった場合、弟子たちは鬼神の威力や墨子の教説に、たちま

ち疑惑・不信の念を抱くことになる。『墨子』説話類によると、墨子一代の間はあまり教化の実が上がりなかったようである。

先秦の諸資料からは、墨家集団の統率者が、団員から鉅子と尊称されていたことが分かる。鉅とはもともとは曲尺を指す語であるが、墨家はすべての基準になるものとの意味に転用して、自分たちの統率者をそのように呼んだのであろう。これは、規矩や縄墨・権衡などが、客観性や公正さの象徴として使用されるのと類似の現象である。

墨子自身が、はたして鉅子と尊称されていたかどうかについては、確証がない。ただし『墨子』の中では、墨子はすべて子墨子と表記されていて、これは鉅子墨子の略称と考えられる。そこですでに墨子の時代から、鉅子なる尊称が存在し、墨子が初代の鉅子であったと見なしでよいであろう。

さて戦国期のさまざまな資料は、墨家集団内部で、鉅子が絶対的な権威を保持していた様子を伝えている。ところがこれとは対照的に、『墨子』説話類に描かれる墨子の姿には、絶対的統率者の風貌は、ほとんど見出すことができない。『墨子』説話類に登場する弟子の多くは、全く勉学意欲に欠けていて、墨子の説論にもなかなか腰を上げようとせず、さらには数々の背信行為を繰り返して、一向に恥じ入る様子もなく、はては墨子に面と向かって、あからさまな不信・疑惑の言さえ吐いている。

こうした弟子の言動は、墨子の時代には、まだ鉅子の絶対的権威が確立していなかったことを雄弁に物語っている。大半が功利的な動機から入門してきた弟子たちに対し、墨子が鉅子としての絶対的権威によって教化できなかったところにも、墨子が鬼神信仰なる便法に頼らざるを得なかった、原因の一つが存在したのである。

墨子の思想は十の主張からなり、これを十論と呼んでいる。その内訳は、(1) 血縁や門閥に頼る人材登用を否定して、君主に能力本位の人材登用を求める尚賢、(2) 上は天帝や天子から、下は里長や家長まで、各段階の統治者の価値基準に従って行動せよとする尚同、(3) 自己と他者を等しく愛し、他者を犠牲にして自己の利益を図るなど説く兼愛、(4) 他国を侵略・併合して自国の領土拡大を図ってはならないと訴える非攻、(5) 贅沢を戒め、物資の節約を勧める節用、(6) 富を浪費する豪華な葬儀や、